

難波宮発掘から50年 聴いて観て眺めて見て歩く遺跡

## 大阪のシュリマン 難波宮発掘に情熱 を掛けた山根徳太郎氏を偲ぶ

日時:11月14日(日)午前11時~午後4時

講師:流通科学大学教授 長山雅一氏

会場:大阪歴史博物館 & 難波宮跡公園

### 難波宮を掘った人を忘れないように



大阪には「難波宮」があった。今は、実証された歴史として、「難波宮跡公園」が大正時代、大阪城公園近くに広がっている。しかし、ほんの50年前まで、それは一人の学者とその活動を支える人々以外には、信じる人のいない日本書記に記された『幻の宮』であった。「難波宮」の伝説の扉を開けた人の名は、山根徳太郎。大正時代、大阪城の南側(現中央区法円坂)の陸軍敷地で偶然出土した瓦を見て、伝説の難波宮がこの地にあると確信

し、1952年に大阪市立大学を退官後、難波宮の調査研究に取り組み、1954年から発掘調査を開始。トロイの遺跡を発掘したシュリマンのように、人々が伝説だと信じていた難波宮を掘り当てた。更に、発掘後も次々と都市開発の波に襲われた難波宮跡を、国民共有の遺産として遺跡を残そうと心血を注ぎ、1973年7月28日、84歳の生涯を閉じた。そして今、山根徳太郎氏の胸像は、自ら発掘した「難波宮」を眼下に見渡すことができる「大阪歴史博物館」10階の「山根徳太郎コーナー」に佇んでいる。そこには、思いを語る声や発掘・発見までの道のりについての紹介ビデオが流され、陳列台には遺品や発掘の動機となった瓦の破片が納めてある。

中国の人々は「井戸を掘った人のことを忘れない」ことを大事にし、日中国交の先駆けとなった田中角栄氏をいつまでも熱く敬っている。今の日本人は何事につけても、井戸水を当たり前のように飲みふけるばかりで、掘った人の労苦もこの水を周りの人々や次の世代とどう分け合うのかさえ忘れていたような感さがある。中国に習って、「難波宮を掘った人のことを忘れてはならない。」とばかり難波宮発掘50年後に、先鞭を切って幻の宮殿の扉を開けた山根徳太郎氏の威徳を顕彰する会を企画した。そして、発掘現場で山根徳太郎氏から「歴史は男子一生の仕事となる」という薫陶を受け、歴史家の道を選んだ長山先生を案内役に聴いて観て眺めて見て歩き。ゆっくりと難波宮という大阪の歴史絵巻の世界を堪能させていただく機会を得たことに感謝したい。

### 大阪春秋と難波宮

私は創刊30年の大阪春秋の同人である。大阪市の教育委員長を務められた故伊勢戸佐一郎氏や大阪在住のベルギー人のジョン・カメンさんの紹介で、大阪春秋の編集会議に潜り込んだのが、もう10年程前。お茶汲みのつもりで潜り込んだが、これは熟塾という大阪探しの会を主宰しているので、講師を探せないかという下心があつての潜入。大阪春秋は、(株)三幸の創業者 堀内広昭氏によって創刊され、(株)三幸の企業メセナの先駆けであったが、昨年、(株)三幸に他の企業資本が投入される段になって、どこの企業にもありがちな景気が悪いから「文化どころではない」という視点から支援打ち切り、廃刊となった。景気は悪いは、物が有り溢れている御時勢だからこそ、「文化」の確立が現世来世の豊かさを生むと私自身は思っているのだが……。そして、その閉ざされた扉を押

し開けたのが、(株)三幸で総務の仕事として編集業務に携わってきた神野さん(熟塾塾生)の呼びかけに応えた新風書房の福山社長。今度は、誰の何のバックもない。大阪春秋では、私自身も熟塾で少人数だけでお話を聞いただけではもったいないと、文楽の人間国宝の竹本住大夫師匠や、鶴澤勘治師匠の講義をまとめた原稿を掲載いただくなど、僅かだが紙面を飾ったことがある。有名無名、公人、学者、町人問わず大阪を愛する人々が自由闊達に筆を走らす地場の歴史研究書として、「出版は東京」という流れに関わりなく、30年もの間大阪をテーマに出版し、発信してきたことには大きな意味を感じている。そして、復刊後も編集委員として僅かばかりだが協力させていた

「大阪春秋」一冊 定価1050円 書店でも販売  
編集部・電話:06-6766-3715  
会員:年会費1万円(季刊誌・講演会招待他)

### 聴いて観て眺めて見て歩いた難波宮

復刊号平成16年春号「上町大地の魅力」復刊記念の講演会の司会を仰せつかった縁で、今回の企画に結びついた。長山先生の講義では山根徳太郎氏を慕って大阪市立大学に入学し、卒業後は歴史の道へ、詳しくは大阪春秋「難波宮の魅力」で紹介されたことが講義の大枠となる。お話の中で、山根徳太郎氏にお供して東京に支援活動の談判に行った時も、真夏にドジョウ鍋に熱いお茶を飲む等、体調を調べてから面談に臨む意気込みに、国会議員の家に約束の時間に行ったときも不在であったため、秘書が車で帰ってくださいますと車代をそと渡したのを、「そんなものをもらう筋合いはない。返して来い」と一喝されたことなど、難波宮発掘保存に実直に向き合った気骨ある山根氏の横顔が髣髴と想像できる逸話をお聞き出来た。

更に、発掘場所である後期難波宮大極殿復元基盤から四方を眺めると、高速道路の高架を低くして大阪城を眺めることができるよう談判した先生の思いを見ることができた。遠い将来、高速道路がなくなりNTTのビルが立ち退くと、大阪城公園と一つなぎになった大規模な史跡公園構想など、その場に立って見ないと見えないものがあることに気付いた。そして、NHKの地下に保存されている難波宮の「並び倉の遺構」も見学。歴史博物館の10階では、かつて宮殿での衣装を再現した展示物を見おわると、スライドがあいて、遠く山々に、先ほど見て回った大極殿基盤をはじめとする遺跡を眺め、その大きさを感じることができた。会の最後に、古代都市についての特別展示を見学して、半日にわたる見学コースを終了。知っているつもりで知らなかった難波宮の隅々を見て歩いた企画に沢山の発見があった。まるで、難波宮の魂が呼び寄せたかのような発掘への道のり、その山根徳太郎氏の夢はまだ未来へ続いている……。原田彰子



参加者:(74名順順、敬称略)一般:阪口興・早瀬やえ子・森安律子  
塾生:阿久根昌夫・井上章・大森史子・北原祥三・金山正博・  
下野譲・杉山英三・田中稔三・中山恵三・西野晃・西野順子・  
原季美子・原田彰子・原田貴司・林章・深堀正晶・山本ゆき